

優秀賞 高学年の部

## 背中洗い

毎日いっしょにお風呂に入って、背中を交代で洗うことが、ぼくとお父さんとの約束になっている。お父さんは、仕事を家に持ち帰っても、お風呂の時間に間に合うようにしてくれているし、ぼくも見たいテレビよりもお風呂の時間を優先するようにしている。

正直、面どうくさいと思うときもある。ぼくの背中中は小さいにお父さんの背中は大いから、ちよびり、ぼくがそんなをしている気分にもなる。それに、仕事であせをかけたお父さんの背中中は、すぐにあわが立たなくなるから、洗うのはけっこう大変だ。

それでも、ぼくの手の動きに合わせて真つ白いあわがふえ、お父さんの背中を包み込んでいくのを見ると、何だかうれしくなる。そして、ぼくの左手にお父さんの体温が上がっていくのが伝わると、ぼくもボカボカになる。

そのときふと、ぼくは、津波でお父さんを亡くしてしまった男の子のことを取り上げたテレビ番組のことを思い出した。

大地震のすぐ後、ぼくと同じ4年生の男の子は、家族といっしょにひなん所の学校までにげた。でも、その子の父親は「近所のお年寄りが逃げていない」と言い、学校から車で出る。そして、あの大津波。男の子が次に父親と会ったのは体育館。それも、毛布にくるまれて横たわっていたのだ。男の子が父親の顔に手を当てると水より冷たくなっていったという。

神奈川県

桐光学園小学校 四年

佐野 裕愛

そう、亡くなっていたのだ。

ぼくは、もしこの話が自分だったら、と考えた。すると、自然となみだがこみ上げてきた。

ぼくは、お父さんに聞いてみた。「ねえ。お父さんだったら、助けに行く?」「さっきのテレビの話か。その場になつてみないとわからないなあ。」と、お父さんは答えた。ぼくは、どうしてわからないなんて言うの? 家族は全員いて家族でしょ、いっしょにいるのが当たり前でしょ、とちよつと悲しくなつた。

すると、お父さんは言った。「いいか。自分があの場所に住んでなくて良かったとか、自分は運が良いだとか、自分のことばかり考えていちゃだめなんだぞ。苦しくてつらい思いをしている人たちが、助け合つて上を向いてがんばろうとしている、優しさと強さを学べ。」と。

ぼくは、どきりとした。すぐくむずかしいことだけど、自分の事ばかり考えていたらいけないんだ、と思った。そして、今までよりもつと、家族といっしょにいる当たり前前の時間を大切にしなくちゃいけない、と思つた。

今、ぼくができることは、お父さん、お母さん、お姉ちゃんに、ぼくのせいっぱいの優しさをぶつけることだ。

ぼくは、もう一度ていねいにお父さんの背中を洗い始めた。温かいお父さんの背中を洗えることへの感謝の気持ちをごめて。